



愛知淑徳大学

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第36号

発行年月日: 2013年10月15日
 〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
 Phone 0561-62-4111 EX 2498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第36号ニュースレターの目次

- 第27回定例セミナー「『女ことば』はつくられる」報告…………… 1・2
- 学生感想文…………… 3
- 暴力性の根とともに…………… 4
- 「男のまち」に生きた女性…………… 5
- にじいろちらしずし…………… 6・7
- 2013年度ジェンダー・女性学関連授業紹介…………… 8

2013年6月5日に第27回定例セミナー「『女ことば』はつくられる」を両キャンパスにおいて開催いたしました。以下はその概要です。

第27回定例セミナー

「女ことば」はつくられる

講師 中村 桃子さん
 (関東学院大学経済学部教授)



長久手キャンパス

私たちは日常生活のなかで言葉と性差の関係を自然発生的なものとして捉えがちだが、決してそうではない。むしろジェンダー化された「女ことば」こそが、私たちが「女」という枠組みに封じ込める力を持つ。中村さんはこうした性別化・規範化のプロセスについて、明治期の「女学生ことば」をたどりながら明快に語ってくださった。

中村さんによれば「女学生ことば」の創生には4つの過程があるという。第一は「性別化」。明治初期の新聞や雑誌掲載小説には、早くも男子学生と同じ「書言葉」を使う女子学生たちを否定的に捉える言説が

登場する。こうした具体例を挙げながら、女子学生と男子学生を言葉づかいによって分離しようとする動きに言及された。

続く「選択」のプロセスでは、女子学生にふさわしい言葉として「てよ・だわ言葉」が発見される。この普及に大きな力を及ぼしたのが言文一致体小説であった。当時の小説家たちは新たに出現した「女子学生」という存在を表象する方法を模索しており、そのなかで選ばれたのが、この「てよ・だわ言葉」なのだという。中村さんは当時の女子学生の言葉づかいが実際には多様であった点にも触れ、彼女たちが自ら「てよ・



「だわ言葉」を使ったためにこの言葉が女子学生の表象になったとは考えにくい、むしろ小説をはじめとするメディアの力によって、「つくられた」側面が大きいことに注意を促された。

「てよ・だわ言葉」は新たに発見・創造された言葉であるがゆえに、次の第三過程では軽薄さの表象として貶められることとなる。中村さんが例に挙げてくださったのは、三宅花圃の小説『藪の鶯』（1888年）。登場する4人の女子学生たちを結婚肯定派（＝規範的娘）と否定派（＝軽薄な娘）に分けて彼女たちの言葉づかいを分析すると、結婚否定派の娘たちが「てよ・だわ言葉」の使い手として描かれており、新しい言葉を使う女性たちが冷ややかな眼で捉えられている様子がわかる。ここでは「しとやかさ」や「女らしさ」とは対極の、「知識を身につけた軽薄な女」の象徴として「てよ・だわ言葉」が機能しているのだ。

最後のプロセスは「セクシュアリティ化」。中村さんによると、高等女学校令が公布される明治30年代ごろから「てよ・だわ言葉」が女性を性的対象として描く際の手立てとなり、女子学生は近代的なセクシュアリティによって特徴づけられる「女学生」として表

象されるようになるという。ジェンダー化された言葉は彼女たちのアイデンティティを作り出す一方で、男子学生との区分を強化し「良妻賢母」思想に囲い込む力として作用しはじめる。「てよ・だわ言葉」に代表される「女ことば」は、女子学生を「男子と対等な近代国民になりうる危険な存在」から、「男の性の対象物として明確に区別される存在」へ変換する大きな力になった（なってしまった）のだという結論を伺って、あらためて言葉とジェンダー、言葉と社会の関係について考えさせられた。

「それが不思議なんだ私は。女言葉をつかうのが女にとって自然なことであるならば、女同士がしゃべるときにゃ、女言葉だらけになるはずだろ。それが逆なんだもん。どうしたことなのかね？」——永井愛の戯曲『ら抜き殺意』（1998年）に、異性の恋人にだけ女ことばをつかう女性・遠部その子に対して、別の女性・堀田八重子が疑問を投げかけるシーンがある。中村さんの講演のあと偶然この作品を手にしたのだが、八重子の声の中村さんの声に重なって、忘れがたい台詞になった。

中村さんには『ことばとフェミニズム』（1995年）、『ことばとジェンダー』（2001年）、『「女ことば」はつくられる』（2007年、山川菊枝賞）、『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』（2007年）、『女ことばと日本語』（2012年）など、多数のご著書がある。今後もさまざまな著作を通して、言葉をめぐる私たちの固定観念を鮮やかに覆してくださることだろう。

（文責 IGWS運営委員 酒井晶代）

星が丘キャンパス

午後の星が丘での講演に参加しました。午後の講演は、特に授業の振替もなく、一般の方も含め20名ほどの参加者で、和気あいあいとしたセミナーでした。

印象的だったことは、中村さんの講演のマネジメント力です。聴衆とのやり取りが、抜群にお上手でした。専門がコミュニケーションなので、どうしても目がいってしまうのですが、初めて会う人々とどのように関われば伝えたい内容を聞いてもらえるのか、という引き出しの豊かな方でした。講演の初めに、名古屋に来たのだから観光をしようという回られ、途中で出会った方との会話を紹介されたり、事前の連絡なくさりげなく聴衆の一人として座っておられたカリフォルニア留学時代のご友人とのエピソードや会話を急ぎょ入れ込まれ、自然な形で講演が始まりました。また、講演中も、聴衆を参加させるための工夫がありました。A4判5枚にびっしり情報の書かれた配布資料を、1区切りずつ聴衆が読み、中村先生が「つつこみ」コメント

をされるというスタイルで進みました。普段は男子学生の多い大学で授業をされ、その調子で午前中は長久手で講演を実施され、本学の学生達へはインパクトが少し強かったようです。午後はソフトな対応に変更されていました。自身が尊重してもらいつつ参加しながら講演を聞くことが出来、だけれどもかなりクリティカルな内容の講演で、関わり方と伝え方の勉強にもなりました。

（文責 IGWS運営委員 福本明子）



学生感想文

木原 明日香

私は6月5日に、本学で行われた中村桃子先生の講演「『女ことば』はつくられる」を聴いてきました。講演の内容は「『女ことば』の基となった『女学生ことば』はどのようにつくられたのか」。私はこの講演を聴くまでは女ことばは昔から存在していて、とても歴史の古いことばだと思っていました。しかし中村先生によると、明治時代以前には女学生ことばがなく、明治時代の女学生も初めは男子学生と同じことばを使っていたそうです。私はこのことにとっても驚いたと同時に、百余年の歴史しかない女学生ことばがなぜここまで社会に浸透してしまっているのかという疑問を抱きました。この疑問は講演の中で先生が説明してくださいましたため解消されたのですが、結論から言うと「女学生ことばは近代小説によってつくられたから」だそうです。つまり、女学生ことばは「メディアによってつくられた」と言えると思います。この当時は、男子は労働力、女子は良妻賢母という男女で区別された国民性が要請されていました。そのために「女学生こと

ば」をメディアによって創り出し、男女の区別をはっきりさせようとしたのです。

当時、実際には女学生が使っていたことばは多様でした。しかし、その多様なことばの中から「良くってよ」や「いやだわ」などの「てよ・だわ言葉」が、メディアを通じて「女学生が使うことばはこれだ」と押しつけられたのです。そして、現在私たちは何の疑いもなくこの「女ことば」を女性が使うことばとして、女性が使うべきことばとして認識しています。

私は今回の講演を聴いて、女ことばを使うことによって私たちは「常に行儀よくしていなければならぬ」という女性ジェンダーを無意識のうちに常に身につけさせられていると考えました。つまり、現代の女性たちは自分から女性ジェンダーを被っているのだと思います。これからは女性の方からも殻を破っていく必要があるのではないのでしょうか。

(本学文学部国文学科4年)

柴田 佳孝

女言葉を作ったのは、当時最大の娯楽であった小説だった。この事実は小説を書く私に少なからず様々なことを考えさせる機会となった。メディアプロデューズ学部の学生なので、私は小説を書く。

女言葉を作った作家は、当時女子学生の一部が使用した言葉を意図的に女学生の象徴として使用した。一方、私はそれを無意識に女性の象徴として使用していた。むしろ、私だけでなく最近の作家は女言葉を用いないことで意図的に「気の強さ」や「男勝り」を表現することが多い。一般的でない言葉を使わせて、他と差別化する表現方法は今も昔も変わらないのだろう。

小説が言葉を作るのだとすれば、小説を書く人間はその影響力を意識し、自覚して責任感を持ちながら書く必要があるだろう。現代最大の娯楽とされるテレビも影響力の大きさから責任を意識するべきだ。

昔は軽薄な言葉とされていた女学生言葉が、今や丁寧な言葉の筆頭になっている。これは、ひらがなを思い起こさせることだ。ひらがなも出始めは女の文字と呼ばれ、公文書には使えなかったようだ。土佐日記は作者の紀貫之が「旅に同行した女性」の目線で、かな文字で記している。それが今では学校で子供が習い、公文書に使われる様になった。

なるほど歴史は繰り返すともいうが、一部の女性が使った言葉が注目されて最終的に一般へ浸透していく過程は非常に似ていると私は思う。

言葉というのは自然的というより何かに利用される形で生み出されていくのだろうと実感させられた。

(本学メディアプロデューズ学部
メディアプロデューズ学科1年)

暴力性の根とともに

小池 末樹

星海社という出版社から11月に、女性を愛する女性、いわゆる「レズビアン」にフォーカスした新書が出版されます。著者はレズビアンを公言しているタレント（フランス人の妻あり）の牧村朝子。私、小池は編集とイラスト作成を担当しています。テーマはセクシュアルマイノリティですが、セクシュアリティについて悩みのある人にも、そうでない人にも、どちらにも読んでもらいたい本です。

私は今のところ異性愛者、いわゆる「ノンケ」です。セクシュアルマイノリティ当事者ではありません。セクシュアリティというテーマに限らず、「非当事者」が「当事者」のテーマに関わることは、当然のことながら難しさが付きまといまいます。彼らの怒りや悲しみに、べったりと寄り添うことは出来ないからです。もちろん私は著者ではなく編集者ですから、非当事者であっても「無関係」ではないのだという意識をもった上で、一つ一つの言葉を吟味することが仕事なのですが、今回は特にその難しさを痛感しています。

「こんなソフトな言い方ではリアルな気持ちが通じないのでは？ でもこっちの言葉にしたとして、逆に傷つく人がいたら？ じゃあもっと説明を入れる？ でもあまり長いと読む人がうんざりするし……」

例えば私が、目の前の人間に何か差別的な、腹の立つことを言われたとします。私は短気だから、その場で自分の怒りを解消するために、相手の襟首をつかんで、「バカヤロー、今言ったことを取り消せ」と怒鳴るかもしれません。相手はそれにひるみ、あるいはドン引きし、私が怒っている、ということくらいは理解する可能性があります。でもこれが本になると、「バカヤロー」では意図が通じない。ヒステリックな女が何か叫んでる、という風に見られて終わりです。

「私」が何の言葉に傷ついたのか、その言葉は多くの場合どういう意味を含むのか、その意味と「私」の現実がいかに食い違っているか、その言葉が使われなくなった世界で他ならぬ「あなた」がどんな安らぎや希望を得るのか。そういったことの伝わる文章でなければ、「バカヤローと言いたくなった気持ち」が文字の中で生きることはありません。ただでさえ誤解されがちなレズビアン（男っぽい女性ばかりなのだとか、普通の女性よりエロいに違いないとか、まったくもって誤解です）のことを、どんな言葉で表現したらより理解してもらえるのか、いつも試行錯誤ばかりです。

この本を作るにあたって二人で決めたことは色々あ

りますが、「誰かを糾弾するような、攻撃的な本にはするまい」ということは何度も言い合いました。何をもち「攻撃的」とするかは人それぞれですし、本のテーマによっては、糾弾そのものが価値を持つ場合もあります。ですが私たちは、「なるべくトゲトゲしない」ことを選びました。それはなるべく気軽な、楽しい気持ちで読まれたいからですが、そうした言説で逆に傷つく、疲れる人たちがいることを知っている世代だからでもあるかもしれません。

これは間違っていたから無かったことにする、その代わりにもっと良いこれを使っていこう——そうやって進んできた時代の先でも、世の中はやっぱり平穏を得ていません。「ただ新しいものを仕入れてきても同じだ」ということに、私たちは皆、もう気づいています。

ジェンダー・セクシュアリティというテーマに絞ってこの世界を見た時、考えることがあります。性差や同性愛という言葉や概念が消滅してしまえば、それらを原因とする争いは無くなるのでしょうか。色々な意見があるでしょう。でも、私はそうではないと思っています。言葉の奥の、“根本の同じさ”に立ち返れなければ、何かを消した“つもり”になるだけではないでしょうか。

原稿に向かい、ジェンダー・セクシュアリティにまつわる強い言葉や難しい言葉を、読みやすい、やわらかい言葉に置き換えていく作業に没頭していると、「この作業の中にも、私自身の暴力性がこめられているのだ」と感じます。

その暴力性は、ジェンダーやセクシュアリティにまつわる、差別的な言葉を持つ暴力性とも同じ根を持つものです。もちろん、現時点で差別的とされている言葉は使われるべきではありません。私も使わないよう心がけています。でも、自分の言葉に自分の見方で得た正義を注ぎ込んでいくしかない以上、いつだってその“狭さ”は暴力になり得ます。

暴力性の根は地中で繋がりが、どこへでも養分を運び、地上に芽を出します。私は「バカヤロー」と言ってやりたい相手と、他のどこでもないそこで繋がっている。そのことを忘れないでいたいと思います。

本学文化創造学部文化創造学科 2011年度卒業

「男のまち」に生きた女性

山本 理佳



今でこそ、女の職業は乏しい。女の賃金は^{やす}安い。けれど、若しも世界中の女が、此決心を持って立ったならば、相当の仕事も出来、優に男を支配し得ることは、進化の経路に見て明らかである

私が研究対象地域としてきた佐世保市（長崎県）は、軍事や重工業を担う男性が主役の、いわば「男のまち」と称されてきた都市である。この佐世保では近年、その中で女性がどう生きたかが「発掘」され始めている。

たとえば「佐世保女性史の会」は女性への聞き書き等を記録し、まとめた『させぼの女性史』を1990年代に複数巻刊行した。その第1号で紹介されていたのが、冒頭引用文の著者、上野葉子氏であった。本稿で提示する上野葉子氏の経歴や論考はその紹介記事である宮脇（1992）からの引用による。

上野葉子氏は明治19年岐阜県で生まれ、明治41年に東京女子高等師範学校¹を卒業し、県立福井高等女学校教諭の職に就いた。その後、明治43年に当時海軍中尉であった上野七夫氏と結婚し、夫の転勤により佐世保に明治45年から大正3年まで約2年間住んだ。ここで彼女は私立成徳女学校²の教諭として勤務した。

冒頭引用文は、上野葉子氏が佐世保在住時代に雑誌『青鞥』に寄稿した論考^②の一節である。彼女は福井高女教諭時代の明治44年11月、雑誌『青鞥』の創刊とほぼ同時期に青鞥社員となった。

佐世保は明治期半ばに帝国海軍の鎮守府が置かれ、日清・日露戦争時の最前線基地となった。明治末から大正初期は軍港施設の大拡充期にあたり、軍港都市として急速な発展をとげていた時期であった。この頃の男性人口の対女性人口比率は120～130%と極めて高く、まさに「男のまち」という様相であった。

このような状況下で生まれたのが冒頭引用文である。ことに上野葉子氏は、多くの軍関係者の子女の通う女学校教諭を務め、また軍備拡充の重要な任務を果たすエリート造兵士官の妻であった。軍人の子への教育、軍人の妻としての役割、ここに適合したのは当時の良妻賢母主義的な風潮であったろう。ところが彼女は、その風潮を「千紫万紅の個性をたった一つの型に容れてただ一途に貞淑なれ台所に忠実なれと強いて其結果が何うなるか」^①と説いて痛烈に批判した。そして「自営自活、最も、女の地盤を固めるものは女の職業である」^②と女性の社会進出・職業的自立を訴えた。冒頭の引用文は、そのことを前提として、女性

が就ける職業自体の乏しさや低い地位を、女性の意志と活動によって、改善していくことを鼓舞するものである。「優に男を支配し得る」という言葉が、海軍のまち佐世保で、海軍士官の妻から発せられたということに、私は少なからず驚いた。

上野葉子氏は母親の猛反対にあいながらも進学の意志を貫いた。そして福井高女の教諭時代、夫や息子に先立たれたその母親の面倒をみることとなった。そうした中で、自分ひいては女性の自立に対する強い思いが形成されたともいえるだろうか。当然、夫による妻の職業や文芸活動に対する理解・評価も大きかったであろう。そのことは彼女の死後、夫の七夫氏が『葉子全集』を編集・出版したことからも十分にうかがえる。

さらに以下の文章からは、そうした理解ある夫との恋愛の末の結婚生活において、ひとときも「自分で生きる」ことの切実さを忘れなかった彼女の気概が感じられる。

醒めたる現代の若人達よ私達は恋愛の神秘を讚美する傍、生きて行かねばならぬと云ふ問題を露の間も忘れてをることは出来ない。自分で生きて行く！此不粋な生活問題！これが華やかな恋の背後に立って黒い大きな手を掲げてのしかかってをるではないか^③

こうした一個人の女性のパワフルな生きざまが「男のまち」としての佐世保で展開されたことは、まさに「発掘」されるべきものであろう。私自身、女性史発掘の重要性を改めて認識するものであった。

【注】

- ¹ 上野葉子氏が入学した明治37年時は女子高等師範学校。
- ² 前身が私立佐世保女学校。大正元年高等女学校令による認可を得て私立成徳女学校に改称。

【引用文献】

宮脇明子1992. 成徳女学校に勤務した『青鞥』の「新しい女」。(佐世保女性史の会『させぼの女性史 第1号』9-17)。

雑誌『青鞥』上野葉子氏寄稿論考

- ① 「「ルーゲン」を弔ふ」第2巻7号（明治45年7月）
- ② 「進化上より見たる男女」第2巻10号（大正1年10月）
- ③ 「超脱俗観」第3巻4号（大正2年4月刊行）

本学 交流文化学部 講師

にじいるちらしずし

8月31日（土）と9月1日（日）に名古屋大須の七ツ寺共同スタジオで演劇公演を行いました。当研究所の研究活動として、大学より2013年度特別教育研究助成を認められた研究プロジェクト「演劇的アプローチによる『違いを共に生きる』啓発プログラム開発」の一環です。参加した学生たちが初期の段階でこのプロジェクトを「にじいるちらしずし」と名付けました。さまざまな題材を織り交ぜて演劇を作ろうとしていたことや多様な人が関わっていたことが名前の由来となりました。自分の性別に違和感を覚える学生による家族や友達との関わりの中での体験や、就職活動中にはじめて直面した性差別など、学生たちの実体験からくる思いや問題意識が演劇の主要なモチーフとなっています。本学メディアプロデュース学部の角田達朗教授が監修をひきうけてくださいました。ご自分が主宰する演劇ユニット「空宙玩具(TACO)」のメンバーを演劇指導者として招いてくださったり、学生からの聞き取りやアンケート調査をもとに台本を作成したり、レズビアンタレント牧村朝子さんを招いたワークショップの同時開催を企画されたりするなど充実した内容の公演となるようご尽力くださいました。

また練習では、演出家の刈馬カオス^{カルマ}先生が演技の指導、振付指導を専門とする山田珠実先生が振付指導にあたってくださいました。刈馬先生と山

田先生は本学非常勤講師です。先生方の熱心な指導のもと、学生たちも大半が演劇未経験者ながら真剣に練習にとりくんだおかげで千秋楽の後には、涙を見せた学生もいました。





全3回の公演で合計160名の方がご来場くださいました。演劇関係の方々からは「入場料を払ってもよかった」、女性学に詳しいの方々からは「啓蒙的なジェンダー演劇かと思ったが、押しつけがましくなくて楽しめた」「ここだけの公演ではもったいない」などおほめの言葉をいただきました。一般の方々からも「身につまされた」「考えさせられた」などの感想がよせられました。

大学祭の行われる11月3日(日) 11時より、内容と過程を振り返りつつ改めてワークショップを行う予定です。こうした活動に基づいて相互啓発・情報発信・交流までのプロセスを学ぶ実践プログ

ラムを構築し、本学の理念である「違いを共に生きる」ための活動モデルとして内外に発信することがプロジェクトの目的です。具体的には語り合いからワークショップに至るまでのプロセスを記録・解説する冊子をまとめます。主な内容として①当事者同士の対話からジェンダー演劇を組み立てる過程、②他者または当事者を演じる過程、③「違いを共に生きる」意味について考える過程をもちこむことで、この実践プログラムがジェンダー教育の場で応用され相互啓発性の高い教材となることをめざしています。

(写真：練習風景と公演風景)



<2013年度(後期)>

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

開放講座

後期の開放講座はございません。

<問い合わせ先>エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市中千種区桜が丘23
TEL:052-783-1665 FAX:052-783-1621(直通)
受付時間:土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/extension/index.html>

<申込期間>

2014年度前期 2月中旬~3月上旬
*2013年度後期申込受付期間は終了致しました。

聴講・科目等履修(学外向け)

人権・ジェンダーと教育(後期)長久手
講師 / 小出隆司・若松孝司

<問い合わせ先>教務事務局

〒480-1197長久手市片平二丁目9
TEL:0561-62-4111(代表) FAX:0561-63-1844
受付時間:土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/faculty/kamoku/index.html>

<申込期間>

2014年度前期 2月中旬~2月下旬
*2013年度後期申込受付期間は終了致しました。

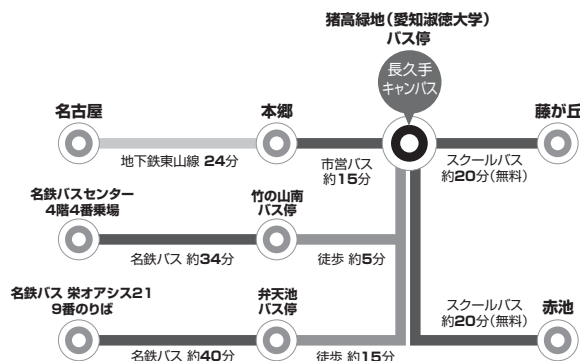
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です!

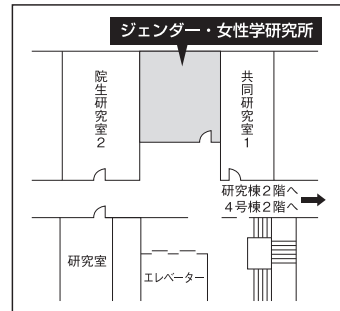
開室日 毎週月曜日~金曜日 **開室時間** 9:00~17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

前号ニュースレターの内容に一部正確さに欠ける記述がありましたので訂正します。つながれとシアター&トーク『みつげもの』に参加した学生が感想文で、ドラマの主人公、直子が「仕事に家事に育児にパーフェクト」な女性になると主張していたことが女性の負担が増えるだけで男女共同参画とはいえないと批判していますが、直子の発言は正しくは次の通りです。

建築家になりたいという直子に父親が「仕事と家庭を両立させる。仕事をしながら家庭を持ち、子育てもして、どれもこれも難しいことばかりだ。その大変さが全然わかっていないんだ。どれもこれも中途半端になってしまうぞ」と言います。それに対して直子が「やってみなくちゃわからないけど一生懸命努力してやってみせます。自分で決めたことは自分で責任取って決めたんです」と答えています。

父親は建築家の仕事は男の仕事だと考えているふしがあり、暗に女性に家事も育児も押し付けているようにとらえられなくもないのですが、そう考える人もまだまだ世の中に存在すると考えられます。ありうる父親像を描き出したことで、このドラマは観客にジェンダー視点で考える材料を提供しています。学生たちもトークの際に、こうした意見を出せばより実りのある議論ができたでしょう。今後に期待します。(石河敦子)

ASU・IGWS2013年度

運営委員

酒井晶代(所長兼) 佐藤実芳 高橋伸子
建部貴弘 西 和久 平林美都子
福本明子 森井マサミ 米倉五郎
若松孝司

事務担当

石河敦子